

ポスト「多民族ぞくニホン」展への課題：大阪の社会空間から

著者	島村 恭則
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	64
ページ	83-90
発行年	2006-12-28
URL	http://doi.org/10.15021/00001539

ポスト「多みんぞくニホン」展への課題

大阪の社会空間から

島村 恭則

1 はじめに

国立民族学博物館の特別展「多みんぞくニホン—在日外国人の暮らし」では、「在日コリアン」「在日中国人」「在日ブラジル人」「在日ベトナム人」「在日フィリピン人」といったカテゴリーのもとで、日本社会に生きる多様な人びととその「文化」が展示された。これまで日本において、日本社会の〈多民族〉状況、〈多文化〉状況を、博物館展示として表象した例は、リバティおおさか（大阪人権博物館）の常設展示を除けば皆無であり、そうした中でこの展示が実現したことは、まさに画期的な出来事であったといえる。

もっとも、すべての表象行為がそうであるように、この展示も、日本社会における〈多民族〉現象に関わる諸状況のすべてを描ききったものであるわけではない。これは、この展示が不十分だということではなく、むしろ当然のことである。本稿では、そのことを前提とした上で、今回の展示の水準のさらに先にありうる多文化主義展示の一つのあり方について、考察してみたい。

2 「ボイル・ハイツ—場所の力—」

全米日系人博物館は、アメリカにおける〈多民族〉状況に関わる先駆的な展示を行なう博物館の一つとして知られているが、ロイド・イヌイ（カリフォルニア州立大学ロングビーチ校名誉教授・全米日系人博物館コンサルタント）によれば、同館の展示は、1992年の開館から現在に至るまでの時間の経過の中で、その表象の視点が変化してきたという。

すなわち、当初は、「アメリカにおける日系人の役割とその存在を専ら主張する」というものであったが、その後、「アメリカ民族文化の多様性の理解をさらに進めるために、日系アメリカ人の体験を共有していこう」（イヌイ 2004a: 105）というものへとパラダイムの転換が起こったというのである。

このことを最も顕著に確認できる展示が、2002年に行なわれた「ボイル・ハイツ—場所の力—」展である。全米日系人博物館があるロサンゼルスは、「人種的にも民族的にも日系人を含めて、さまざまな人種が住んで」おり、それが「ロサンゼルスの中心部

リトル・トウキョウの辺りで交差している」が、「この展示は、そのロサンゼルスの人々の体験と記憶を探究するというもの」(イヌイ 2004a: 119)であった。その展示の概要は、およそ次のようなものである。

「ボイル・ハイツ」の展示は、ボイル・ハイツという地域について行なわれたものでした。この辺は文化的にも民族的にも多様な地域でした。19世紀後半から生まれた町ですが、当時、このへんはエリートが住んでいたところでした。その後、移民たちがやってきました。アメリカに来てから、そこに定着し、そこからアメリカンドリームを追い求めて、よりよい生活を求めていきました。

ユダヤ系のアメリカ人も来ました。ロシア系のアメリカ人も来ました。ラテン系のアメリカ人も来ました。20世紀の初めには、黒人、中国系など、あちこちから来ました。日系人も来ました。1920年代になってからです。これは静的なものではなくて、常に変わり続けました。移民はまずここに来て、ここから旅立っていったという性格があったからです。

アメリカの移民は、この20世紀を見ますと、有色人が多かったわけです。アジアや南米から来た人たちでした。多様な民族文化が存在しました。日系人も、戦前まではずいぶん多く来ました。戦争になったので、西海岸に移転させられ、ボイル・ハイツからは姿を消してしまいました。戦後になり、日系人で戻ってきた人もいましたが、また去って行ってしまいました。

現在、この辺は南米系の人たちが多いです。しかし、こういうルーツはまだ残っています。ユダヤ系の寺院もありますし、日本語学校も残っています。黒人用の施設はないのですが、黒人の人ももちろん住んでいます。今、いちばん多いのは南米系の人たちですが、いずれにしても日系アメリカ人、日系人のこの博物館で常に考えていたのは、日系人の経験を、アメリカという文脈において捉えたいという希望でした。

これもひとつのアメリカの文脈ですが、もっと広く取り上げたかった。戦争中の経験がありましたので、もっと一般的な形で、アメリカというコンテキストで見かけたわけです。私どもが試みたことは、私は博物館のスタッフではないのですが、スタッフがやろうとしたことは、ボイル・ハイツを使って、この地域においていろいろな民族が交差したということで、それが「場所の力」という言い方になったわけです。いわゆる「多文化」という言葉を使うに当たって、単にいろいろな国の人が、ここに一緒に平和裡に住みましたということだけではなく、いろいろな背景と経験をもった人たちが、こうしてやってきたことに光を当てたわけです。

例えばメキシコ系の男の子と日系人が友達になり、必ずしも収容所に行くべきではなかったメキシコ系の子も一緒に行った、ということがありました。友達で仲良くしていた。こういう交差が実際にあったわけです。

お互いの家で食事をしたり、いろいろな国のものを食べることもできました。また、いろいろな教会や寺院がある。自分の宗教ではなくても、お互いに行き来するということがありました。これによって多文化主義を、静的なものではなくて、ダイナミックな環境で見ることができるといえるものでした。

また、私たちの役割は日系人の経験ということですので、日系アメリカ人の観点から物語を語るわけです。もちろん、すべての民族の声も代表しようとはするのですが、世界の歴史に関して、さまざまな資料や物もあるわけです。実際に大勢の方が来ましたので、うまくいったということがわかります。非常に多くの人、日系人以外の人たちがこの展示には来てくれました。これはまさに初めてだったことです(イヌイ 2004b: 295-297)。

ここからわかることは、全米日系人博物館の展示が、〈多民族〉状況下の個別の〈民族〉を表象する段階から、〈多民族〉状況における〈民族〉間の〈交差〉〈関係〉、ダイナミズムそのものを展示するという段階へと移行しているということである。とりわけ注目されるのは、個々の〈民族〉の〈文化〉を単に羅列するのではなく、人びとの間の〈交差〉〈関係〉をこそ描き出そうとしている点、そして、これを「ポイル・ハイツ」という具体的な「場所」の問題として展示を構成している点である¹⁾。

翻って、民博の「多みんぞくニホン」展はどうであったか。本展示は、日本社会の〈多民族〉状況を具体的に、かつ総体として描こうとしており、決して、個別〈民族〉の生活文化をそれ自体が完結するものとして叙述しようとはしていない。筆者が共同研究員として参加した展示構想の段階でも、〈民族〉間の〈交差〉〈関係〉への配慮は一定程度行なわれていたと記憶する。とはいうものの、限られた準備期間では、結果的に、どうしても、〈交差〉〈関係〉よりも、各〈民族〉ごとの実態の叙述に力点がおかれがちであったということも事実であろう。ただし、この点は、段階論的に、現段階ではこれでも十分な成果であるが、今後は、さらなる展開が可能だというように考えておけばよいであろう。

3 大阪の社会空間から

では、叙上の課題へ取り組んださらなる展開、ポスト「多みんぞくニホン」展とはどのようなものとして構想されるのだろうか。以下、思考実験を試みたい。

在日朝鮮人のミュージシャン趙博に「橋」という曲がある（趙 2003：69-71）。

（浪曲）

難波津や 花橘もへドロの薫り 流れも汚し大和川
 仕事にあぶれる頃となり 松の緑の色も褪せ
 泉州堺はよい刃の出所 息子やりたや 出稼ぎに
 ここは名代の生駒の西 上町台地を結界に
 産声上げし東洋の マンチェスターと唄われました
 難波・大阪 環状線を 不弁ながらも努めます～

水の都を 川面に映す 光きらめくビジネスパーク
 誰が決めたか再開発は 銭とイラチの浪速のど根性
 鉄さえ喰らうプルガサリ 泣く子も黙るアパッチ部落
 昔の面影はいつの間にか消え去った
 大阪環状線 京橋駅下車 歩いて10分の帰り道を

千鳥千鳥の足取りで

焼け跡闇市が今にも残る ガード下の屋台も消えて
韓国料理は高級グルメ 笑い豚さえフゴフゴほくそ笑む
商売上手はお手のもの 誰が言ったかコリアタウン
平野運河のどすぐろさ 手垢にまみれた在日ばかり
大阪環状線 鶴橋駅下車 歩いて10分の帰り道を
千鳥千鳥の足取りで

膠の臭いがほんのり残る 木津の河原でソーキソバとキムチをほおばる
けもの皮を剥ぐ代償に 人間の皮まで剥がされた
人はスラムというけれど ここは天国 釜が崎
故郷はここなんだと 胸を張って歌い続けたい
大阪環状線 芦原橋駅下車 歩いて10分の帰り道を
千鳥千鳥の足取りで

ここには、アパッチ部落の住民（多くは朝鮮人だったが、ウチナーンチュ（沖縄人）もいたらしい）、朝鮮人、被差別部落住民、ウチナーンチュ、日雇労働者、そして仕事にあぶれた野宿者、あるいは地方からの出稼ぎ者たちが歌われている。ここには、〈多民族〉、いや〈民族〉といった概念ではおさまりのつかない多様な人びとの暮らしが取り上げられている。

ここに描かれている多様な人びとの〈交差〉〈関係〉について、〈多民族〉〈多文化〉状況についての研究（ここでは、〈多文化主義研究〉と称しておく）は、ほとんど注目されてこなかったといつてよいだろう。〈多文化主義研究〉では、大阪ウチナーンチュや在日朝鮮人それぞれについての調査や考察は多くある。しかし、被差別部落住民や日雇労働者、野宿者を含めた上で、多様な人びとの間の〈交差〉〈関係〉を見据えた研究はほとんどないのが実状だ。

大阪に暮らす人びとの多様性（とりわけ階層的多様性）については、〈多文化主義研究〉ではなく、地理学や社会学のほうで積極的にこれを対象化している。例えば、地理学者の水内敏雄は、大阪市をフィールドに、「城下町の歴史的市街地を取り囲んで、明治以降市街地化してゆくエリア」（水内 2004：27）としてのインナーリング、具体的には「大阪環状線沿線、特に東部から南西部にかけてのマイノリティの三日月地帯」における「在日、日雇、部落、沖縄出身」（水内 2004：56）の人びとをめぐる空間形態、社会制度、文化を分析している。この場合、そうした人びとを個別完結的に取り上げるのではなく、「マイノリティの三日月地帯」という一つの「領域」を取り上げ、その社会空間の

あり方を分析しようとしているところに眼目がある。

この水内による大阪の社会地理論は、そこに近年の都市社会学のいくつかの研究成果を重ねてゆくと、さらに立体的なものとして拡大されることになるだろう。例えば、青木秀男（青木 2000）は、「マイノリティの三日月地帯」に位置する〈釜ヶ崎、猪飼野、ミナミ〉を対象に「都市下層と外国人労働者」の実態を調査・分析している。

また、西田芳正（西田 1996）は、大阪環状線から外側へと向かう私鉄沿線、大阪都市圏内の衛星都市にある文化住宅街（低階層集住地域）をフィールドに、そこに暮らす人びとのハビトゥスを分析している。

さらに、教育社会学者の志水宏吉らは、尼崎市の公立中学校を舞台に、主として階層問題、同和地区生徒や在日外国人生徒に関わる領域を扱ったエスノグラフィーを公刊している（志水・徳田 1991）。これらの研究成果を大阪の社会空間分析に接合することで、都市大阪の人びとの多様性はより立体的なものとして描き出されることになる。

あるいはまた、今回の「多みんぞくニホン」が取り上げた、「在日中国人」「在日ブラジル人」「在日ベトナム人」「在日フィリピン人」、あるいは「中国帰国者」といった人びとの存在も、この社会空間分析に接合する形で扱うことで、より立体的に把握し、叙述することが可能になるものと考えられる。

さらに、大阪の社会空間分析は、いわゆるマイノリティや低階層に限定されるべきものではない。近代化、工業化の過程で地方あるいは「外地」から人びとが労働者として流入するプロセスの進行と並行し、郊外の開発とともに「阪神間の芦屋や南部の帝塚山などの高級住宅街に移り住んだアッパクラス、豊中市や池田市、伊丹市などに移り住んだミドルクラス」（中井 2004：7）もまた、当然のことながら社会空間分析の対象である。

さて、ここまでくると、人びとの多様性というのは、マイノリティ、マジョリティ双方を包括的に捉えなければ、見えてこないということに気づかされる。これは冷静に考えれば当然のことではあるが、研究や展示の現場では、研究／展示対象は個別の〈民族〉や階層、地域に限定されがちで、それらの間の〈交差〉〈関係〉、さらにはそうした〈交差〉〈関係〉の上に成立する社会の〈全体〉を多様性の観点から総体として把握するところまでは至らないうらみがある²⁾。

しかし、この多様性を総体として捉えるという視座は、〈自己〉と〈他者〉との〈交差〉〈関係〉をより立体的に把握する上で不可欠のものだ。なぜ自分はいま・ここにいるのか、〈他者〉とのどのような〈交差〉〈関係〉の上に、いま・この自分が存在するのか。全体の中で捉えてこそ、はじめてこれを適切に考えることが可能になる。

この位置に立ったとき、そこでは、さまざまな次元で幾重にも引かれた〈自己〉と〈他者〉との境界線を再確認することにもなる。と同時に、〈他者〉との間に多様な次元で何らかの〈交差〉〈関係〉（それは例えば、排除／包摂、差別／被差別、あるいは搾取／

被搾取といったもの)が存在するというにも気づかされ、その意味で、人びとは、他ならぬ〈地続き〉(関根 1995: 3-4)の空間にいる(この場合の〈地続き〉は、〈自己〉と〈他者〉との〈同質〉を意味するものではない。葛藤、拮抗をはじめとするさまざまな〈交差〉〈関係〉、種々の境界線といったものが生み出されるのは、その空間が〈地続き〉だからであり、〈地続き〉でなければそもそも〈交差〉〈関係〉は生み出されない、という意味での〈地続き〉である)ことにも気づかされるはずである。

さて、ここで展示に話を戻そう。以上の論点は、そのまま多文化主義展示の課題であり、可能性である。個別の〈民族〉、個別の〈文化〉の表象ではなく、人びとの相互の〈交差〉〈関係〉を〈地続き〉の社会空間の中でおさえる展示を構想できないか。展示を見る人は、展示で表象される人と実は〈地続き〉の空間におり、しかし、それゆえに、その〈地続き〉の上でさまざまな〈交差〉〈関係〉が生み出され、境界線も引かれているのだという認識を呼び起こさせるような展示を構想できないか。

多文化主義展示は、得てして、マイノリティの文化の表象で完結しがちであり、当事者以外の人びとが観客の場合、観客にとって展示は〈他人事〉になりがちである。しかし、展示される人びととそれを見る(当事者以外の人びと)の間には、排除/包摂、差別/被差別、あるいは搾取/被搾取をはじめ、さまざまな次元での〈交差〉〈関係〉が存在している。このことが伝わる展示、「展示されている人びとの問題は、実は展示を見るあなたの問題なのだ」ということが伝わるような展示、〈他者〉への想像力が自己内省に立脚した上で喚起されるような展示、これが多文化主義展示のあり方として求められるべきである。

筆者としては、「ボイル・ハイツ―場所の力―」のひそみに倣い、「マルチボイスおおさか―多文化大阪の経験―」とでも名づけられるような展示をいつか構想してみたい。

付 記

本稿は、筆者が共同研究員として参加した国立民族学博物館共同研究「在日外国人と日本社会の多民族化」(研究代表者・庄司博史 国立民族学博物館教授)、および実行委員として参加した特別展「多みんぞくニホン―在日外国人のくらし」の準備過程における一連の議論の成果である。

また、あわせて本稿の議論、とりわけ大阪の社会空間に関する議論は、科学研究費補助金(2004年度-2006年度、若手研究B)「『多声・動態的民俗誌』の制作過程をとおした民俗学方法論の多文化主義化」(研究代表者・島村恭則)による成果の一部である。

注

- 1) ここで取り上げた全米日系博物館についての事例報告は、国立歴史民俗博物館が2003年11月に行なった国際シンポジウム「歴史展示を考える—民族・戦争・教育—」の中で行なわれたものである。同シンポジウムは、「セッション1 戦争と表象」、「セッション2 民族と歴史」、「セッション3 博物館教育の可能性」からなり、本稿の主題と関わる議論は「セッション2 民族と歴史」で行なわれた。同セッションでは、ロイド・イヌイ氏による「全米日系人博物館とアメリカにおける日系人の展示—個人的見解—」の他、以下に挙げる報告が行なわれた。また、同セッションの座長は筆者（島村恭則）であった。

マーゴ・ニール（国立オーストラリア博物館）「暗闇をぬけて—国立オーストラリア博物館の先住オーストラリア人展示で我々自らの物語を語る—」

文公輝（大阪人権博物館）「常設展示『在日コリアン』コーナーについて」

吉原秀喜（二風谷アイヌ文化博物館）「アイヌ伝統文化の今日的継承—その教育的意味と意義—」。

このシンポジウムにおける報告と討論は、国立歴史民俗博物館編（2004）としてまとめられている。

- 2) このような中で、リパティおおさか（大阪人権博物館）の展示は、大阪の社会空間を意識させるような形で構想されており注目される。すなわち、同博物館の展示のうち、少なくとも、被差別部落、在日朝鮮人、大阪ウチナンチュについては、大阪の社会空間の中から主題が設定されているように思われる。ただし、その場合も、被差別部落、在日朝鮮人、大阪ウチナンチュという三者の間の相互関係については、叙述は行なわれていない。これは今後の課題だろう。

文献

青木秀男

2000 『現代日本の都市下層—寄せ場と野宿者と外国人労働者—』東京：明石書店。

イヌイ、ロイド

2004a 「全米日系人博物館とアメリカにおける日系人の展示—個人的見解—」国立歴史民俗博物館編『歴史展示を考える—民族・戦争・教育—』東京：アム・プロモーション、104-123頁。

2004b 「多様な民族の交差とは」国立歴史民俗博物館編『歴史展示を考える—民族・戦争・教育—』東京：アム・プロモーション、295-297頁。

国立歴史民俗博物館編

2004 『歴史展示を考える—民族・戦争・教育—』東京：アム・プロモーション。

志水宏吉・徳田耕造編

1991 『よみがえれ公立中学—尼崎市立「南」中学校のエスノグラフィー—』東京：有信堂。

関根康正

1995 『ケガレの人類学—南インド・ハリジャンの生活世界—』東京：東京大学出版会。

趙 博

2003 『ぼくは在日関西人—歌う浪速の巨人・バギヤン奮戦記—』大阪：解放出版社。

中井精一

2004 「お笑いのことばと大阪弁—吉本興業の力とは—」『日本語学』23(11)：6-17。

西田芳正

1996 「文化住宅街の青春—低階層集住地域における教育・地位達成—」谷富夫編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』京都：世界思想社，149-178頁。

水内敏雄

2004 「都市インナーリングをめぐる社会地理」水内俊雄編『空間の社会地理』（シリーズ人文地理学5）東京：朝倉書店，23-58頁。